

(決議)

設楽ダムサイト予定地上流左岸(田口・清崎側)の地質地盤の問題を放置して建設を強行してはならない!

【要約】田口地区西側のダム湖の縁に当たる地山は、規模の大きい複数の断層・破砕帯が貫き、深部まで風化して地盤が不安定なことが平成19年度のボーリング調査で明らかになった。

また、その南端の江ヶ沢方面については、南北方向の規模の大きい断層・破砕帯が江ヶ沢左岸の地山を横断して南側に続いていること、さらに、国の地質調査の不整合面の見積もりが誤っており、実際の不整合面はダム湖の満水位より下に位置することが、われわれの調査によって明らかになった。以上の二つの事実は、田口の市街地の東南東から西南西に連なる地山をとおして、水漏れがほぼ確実に生じることを示すものである。

このまま、設楽ダム建設を強行するならば、田口・清崎地区の市街地および周辺地区への地すべりやそれに伴う津波、また漏水や、地下水の異常が地元住民の生命と財産を脅かし、深刻な被害や不安をひき起こす可能性が高い。これらの対策には、巨額の費用(税金投入)が必要となる。設楽ダムの建設中止を重ねて求める。

【はじめに】設楽ダム予定地付近は地盤が悪い

設楽ダムの建設予定地付近の地盤が悪いことは、電源開発による調査・撤退以来、設楽町民の間では知られてきたことである。事業者である国土交通省中部地方整備局は、「堅固な岩盤で、ダムの建設には支障はない」と述べているが、その言葉にウソ偽りはないだろうか?

ダムサイト予定地右岸の松戸側の小尾根には直径150mにおよぶ大規模な地すべり地塊があり、風化層が厚く覆っている。その尾根のすぐ北側に尾根に添う形で水田として利用されている谷地形があり、尾根全体が大規模な地すべりを起こしている可能性を指摘される二重山稜地形をなしている。ダムサイト左岸の清崎側でも、厚い風化層があり、また割れ目が多く水漏れの可能性が高い地盤が上下流方向に貫いている。これらの問題についても、しっかりした調査に基づいた解決がなされているとはいえない。

以上の点は以前から指摘されてきたことであるが、以下に述べるように、さらに深刻な問題が明らかになってきた。

【1】田口地区西側地山(寒狭川と田口の街の間の地山)について

H19年度設楽ダム田口田尻地区ボーリング調査報告書記載のJ2-3ボーリング

結果によれば、標高 403.6m の孔口から深度約 50mまで、ほとんど D 級の岩質（岩盤が破壊されて土砂～角礫の状態となった状態）となっている。報告書のまとめによれば、「選択的に風化が進む閃緑岩の岩脈が分布することと併せて、（走向傾斜が示されている 2 本の断層（N10W55E、および N83W26N）以外にも）走向傾斜の不明な複数の断層があると考えられ、周辺地山はダムサイトなどと比べると比較的深部まで岩盤に複雑な緩みが生じているものと判断され、湛水時に岩盤傾斜面が不安定化する可能性は否めない」と指摘されている。

【2】寒狭川沿いの大きな断層

なお、H12 年度設楽ダム地質総合解析業務報告書によれば、設楽ダムのダムサイトの選定経過においては、上流案、中流案（上流）、中流案（基準）、下流案の 4 案が検討され、中流案（上流）が採用されて現在に至っている。このダムサイト選定の調査の中で、上流案の計画位置のボーリング調査（U1 孔、H4 年度実施）で、大きな断層破砕帯が寒狭川河床を上下流（南北方向）に貫いていることが判明した。H12 年度報告書で F1 と呼んでいる断層である。F1 断層の走向傾斜は N20W60W、つまり、北から 20 度西の走向で、西に 60 度の傾斜で落ちているとされ、見かけ上 11m の破砕帯を伴うとされている。これほど規模が大きい破砕帯をもつ断層であるにもかかわらず、推定長さを 900m とし、それ以上の検討がなされていない。

【3】断層が地山を横断していれば、水は漏れる

H5 年度の報告書では、この断層が江ヶ沢から地山を横断して南方向に連続している場合には、水漏れの恐れがあることが指摘され、調査の必要性が述べられている。しかしながら、その後実施された「H9 年度設楽ダム線状模様調査報告書」において、この南北方向の線状模様（リニアメント）に関する調査は、全くなされておらず、この調査報告書を読んだのみでは、ここにリニアメントが存在することさえ気がつかないように書かれている。

われわれは、最近の現地調査によって、この南北走向のリニアメントに沿う大きな断層・破砕帯があり、田口南部の地山を横断して清崎方面に続いていることを確認した。900m の長さで国が推定しているのは過小で、少なくとも数キロメートルの長さはあり、幅 10m 程度の破砕帯を伴っている。

【4】地質図（第三紀層と基盤岩との不整合面）の誤り

その外、最近の水没移転者用の宅地造成や道路工事で現れた露頭から、従来のダム事務所の調査報告で描かれている第三紀層と基盤の不整合面の位置が誤っていることが明らかとなった。添沢方面のみでなく江ヶ沢（田口の西南端）

方面においても、不整合面がダム湖の満水位より下になっていると推定されることから、ダムサイト直上流左岸側でも不整合面と第三紀の礫層などから漏水する可能性が高い。

【5】ダムサイトを貫く断層

県道瀬戸設楽線の旧田口駅すぐ上のヘアピンカーブ地点で 2012 年に地すべりで現れた露頭で確認された数メートルの破碎幅をもち、数 10cm の断層粘土を伴う規模の大きい断層・破碎帯は、概略 N45E40NW の走向傾斜で、北東方向の延長線上には田口中学の校庭、南西方向の延長線はダムサイト右岸に向かっている。この断層は、設楽ダム建設事務所が実施したこれまでの地質調査のどこにも記載されていない。

また、設楽ダム地質調査報告書の貯水池内の断層一覧表に d と名付けられている断層は、N45E75S の走向傾斜をもち、その南西方向の延長線はやはりダムサイトの中心に向かっているが、その推定の長さを 500m としてダムサイトに届いていないものとし、それ以上の検討がなされていない。

このように、田口の街を支えている西側の地山には、無数の断層が走っており、ダム湖に湛水した場合に、地すべりを起こすばかりでなく、田口地区の地下への「みずみち」となって、地下水異常をひきおこす可能性が高い。

なお、ダムサイト地点の川底の深度 100m 付近には大きな破碎帯があることがボーリングによって確認されている。

【6】まとめ

これまで明らかになっていなかった断層の存在や、短く見積もられていた断層が実際には大きな破碎帯を持つ長いものであることが判ったことから、深層崩壊や地すべりの恐れが強まり、また、不整合面の見積もりが誤っていて漏水や、地すべりの恐れがいつそう高くなったといえる。

ダム事務所が平成 19 年度に実施したボーリング調査報告自体が、田口地区西方のダム湖の縁を成す地山について、「走向傾斜が認識できない断層破碎帯が複数あると考えられることから、...比較的深部まで岩盤に複雑な緩みが生じているものと判断され」と述べているとおり、湛水によって大規模な地すべりを起こし、田口の街を含む周辺地域に深刻な被害を及ぼす恐れがあることを指摘している。

ダムサイト上流の寒狭川沿いに確認されていた南北方向の 900m の断層の延長が南に伸びていることが明らかになり、江ヶ沢方面の不整合面の見積もりが誤っていたことも重なって、漏水の恐れがますます現実味を帯びてきている。

また、ダムサイトそのものを貫いている可能性がある複数の断層破碎帯があ

るにもかかわらず、ダムサイトのボーリング・データとの対応についての詳しい検討がなされていない。

以上のような状況を踏まえると、このままダム建設を進めるならば、大規模な地山の崩落やそれに伴う津波の発生により、また地下水の異常や漏水を含めて、田口地区、松戸地区、ダム直下の清崎地区など、ダム予定地周辺地域に対して取り返しのつかない人命と財産の損害をもたらす恐れがある。

国土交通省中部地方整備局は、設楽ダム再検証において、現行のダム案が複数の代替案に比べて最も安価で優れているとの結論を出したが、住民の生命と安寧な生活環境を壊すことは許されない。以上のことを勘案すれば、地滑りと漏水対策には莫大な費用の投入が必要となろう。現行のダム案がもっとも優れているというのは、国民を欺くものである。私たちは、設楽ダムの建設中止を強く求めるものである。

2014年4月20日
豊橋市市内にて

設楽ダムの建設中止を求める会
第8回総会